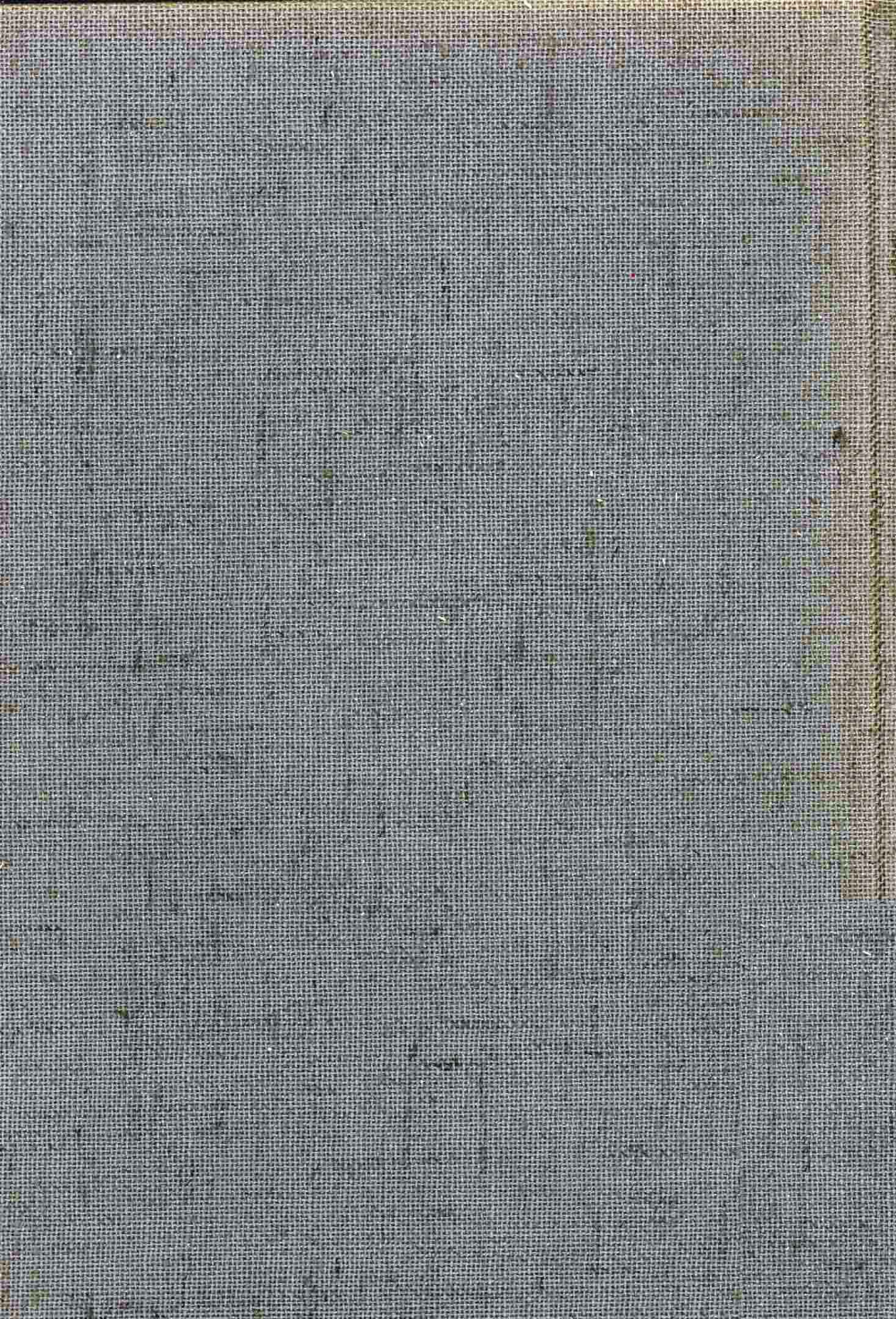




小林勇文集

第八卷

筑摩書房

小林勇文集 第八卷

一九八三年四月二十日 第一刷発行

著者 小林 勇

発行者 布川角左衛門

発行所 筑摩書房

101 東京都千代田区神田小川町二ノ八

電話 ○三(二九一)七六五一営業部

○三(二九四)六七一一編集部

振替 東京六四一二三

印刷所 精興社 製本所 鈴木製本

乱丁・落丁本の場合は御面倒ですが小社読者係宛に御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

Printed in Japan 1983

0395-72508-4604

目次

随筆書画一如

*

日本文人画十選

玉堂琴士慕情

旧い絵の束

家

初期有田の盃

たくましい高菜の花

銀座春雨

「懷素自叙帖」を眺めながら

牡丹と老僧

緊張の美

赤い鞆

ねじ釘の画家

「ねじ釘の画家」補稿

「芋銭名作展」をみて

ポール・ジェンキンス

「日本の文人画展」をみて

「ゴヤ展」をみて

「モネ展」をみて

青花折枝花果文梅瓶

251 250 249 247 245 243 226 195 192 189 187 186

東雲飾雪図

個展に際して

詳細目次

解題

口絵・冬瓜

254 252

一九七九年作

詳細目次

随筆書画一如

絵筆をもって

私の画家たち

岸田劉生

柳瀬正夢

安井曾太郎

河野通勢

長與善郎

大河内信敬

中谷宇吉郎

斎藤茂吉

寺田寅彦

児島喜久雄

木下李太郎

70 67 65 63 60 57 54 52 50 47 44 44 3

一路居士

親しみつつ

漱石の書と絵雑談

蔵沢 明月

雲坪

良寛

大雅と鉄斎の楷書

蒼海 副島種臣

詠士 宮島大八

露伴の書

茂吉の書

翰墨余話

木堂翰墨談

硯

手習記

李朝の壺

後記

137 134 131 126 120 120 113 106 104 102 96 90 87 84 76 76 72

日本文人画十選

蔵沢 竹図

竹田 船窓小戯帖

玉堂 山中訪隠

雲坪 谿山雪霽

木米 端溪登舟図

大雅 渭城柳色図

鉄斎 老子出関

善郎 花図

蕉村 芭図

漱石 南山松竹図

玉堂琴士慕情

旧い絵の束

家

初期有田の盃

たくましい高菜の花

182 179 175 172 166 164 162 160 158 156 154 152 150 148 146 145

銀座春雨

「懷素自叙帖」を眺めながら

牡丹と老僧

緊張の美

赤い鞆

ねじ釘の画家——柳瀬正夢と子供たち——

「ねじ釘の画家」補稿

「芋銭名作展」をみて

ポール・ジェンキンス——日本国際美術展

から——

「日本の文人画展」をみて

「ゴヤ展」をみて

「モネ展」をみて

青花折枝花果文梅瓶——中国明清工芸美術

展から——

251 250 249 247 245 243 226 195 192 189 187 186 184

東雲飾雪図——日本の山水画展から——
個展に際して

隨筆書畫一如

絵筆をもって

小学校時代はまったく遊んで暮らしたといつてよい。学校から帰れば教科書の鞆を投げ出して、山野を友だちと駆け廻って飽きることがなかった。予習とか復習などしなかったが、図画と習字の他は全部甲を貰っていたのだから、人も何ともいわないし、自分も勉強は学校でするものときめていたのだ。大正のはじめころ、小学校の教科書の中に「図画」というのが一冊あって、生徒はその安っぽい本に印刷されている手本に似せて描くことを図画の時間に教えられていた。私はその科目ではいつも乙か丙を貰い、自分には絵は描けぬものときめてしまっていた。青年になってからもその観念がいつまでもしみついていたのであった。

十四、五歳のころにはすぐ上の兄が長野の師範学校に在学中であった。彼はその友達と一緒に白樺派の影響を強く受けており、その余波が私にも自然に及んで来た。兄の本を借りて読み、私も白樺派の人々、ことに武者小路実篤氏を尊敬するようになった。またそのころ啄木歌集を出版社から取り寄せ繰り返しよみ、最初の一首から最後の歌まで、暗記してしまった。啄木歌集を持ってれんげの花の咲く田圃に寝転がっていたことが幾たびもあった。啄木と「白樺」が私の青春の入口であった。私は兄の友達と親しくなり、彼らの行動やいふことに注意を向けた。トルストイやドストエフスキー、ス

トリンドベルグなどを読み、「白樺」の人たちのものに親しみ、敬愛し、その人たちのほめるものに素直に心を向けた。兄たちは師範学校の授業よりも、自分たちの勝手な「勉強」の方が意義があるとばかり、学校に出ない日が多かった。謄写版の同人雑誌を出したりして氣勢をあげていた。

そのころ「白樺」では西洋の画家の作品を紹介していたので、私もそれらの画家たちの名を知り、不鮮明な写真版を見て感激した。兄の友達の中に松川伊勢雄という画を描く男がいた。岸田劉生を尊敬してその影響をうけた画を描いた。彼は岸田を慕って休暇には上京して居候をしたことがあった。

私は大正九年、十七歳の春、岩波書店に入った。そのころの店員というのは昔のでっち奉公と大してちがわなかったと思う。最初の一年間は朝七時から夜十時まで店番をさせられた。掃除はむろんのこと、荷車もひいた。主人の岩波茂雄は普通の店主とはちがって、進んだ考えをもった経営者であったから、十二、三人しかいない仲間は皆主人を尊敬していて、よく働いた。私は体力もあり、健康で、何より本の中で過ごせる生活がうれしくて、はり切って暮らした。上京後間もなく、或る夜、日向の新しき村から上京していると書いて番町の家へ武者小路氏を訪ねたことがある。

信州の兄の仲間たちは師範を卒業し、小学校の教師になった。私の書店員であることを利用して謄写版刷りの雑誌を活版印刷に改め、「創作」と名づけて、大正十一年から発行した。表紙は岸田劉生が描いてくれた。その頃私はまだ岸田に面識はなく、多分仲間の長老格の一志茂樹が頼んだのだろうと思う。私もその雑誌に小説を書いた。岸田を中心とする草土社の展覧会が赤坂の三会堂にあって、私は何回か見に行った。岸田の絵が最も優れていると考え、その作品の前に立ちつくしたのは、まだ昨日のこのように鮮かに私の記憶の中に生きている。その後松川伊勢雄に連れられて、鶴沼に岸田

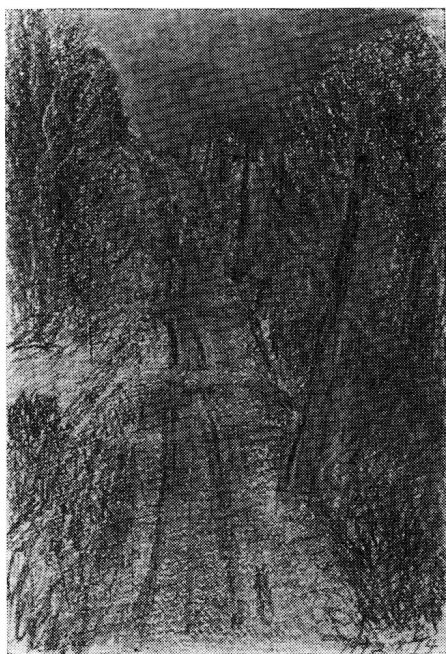
を数回訪ねた。アトリエで麗子を描いている厳しい顔や、食事のときの家族と一緒のお祈りの姿も忘れたい思い出となっている。そのころの鶴沼は閑静な土地で、岸田の描いた鶴沼風景がもっともよくその面影を伝えている。

大正十二年九月一日の関東大地震には、私は東京神田で遭った。二十歳の不遜な若者は、千載一遇の事件を無意味に見過ごしてはならぬと考えて、焼跡などを見てあるいた。そのとき河野通勢が、被害地の風景事物をたくさんスケッチしたときいて、池袋の郊外の彼の家を尋ねて見せてもらった。岸田は京都へ移り、私は鎌倉に住んでいた長與善郎のところへ出入りするようになり、ここで椿貞雄を知った。

大正十五年から、私は編集の仕事をするようになり、京都から鎌倉へ帰って来た岸田を訪ねる機会が折々あった。

私は少年のころから白樺の人々を尊敬し、その人たちの書くものによって人生や芸術に対する目をひらかれたことを後悔していない。そして岩波書店に入り岩波茂雄の下で働いたことを仕合せだと思っていた。岩波は白樺の人たちとも親しかったし、優れた出版人としてたくさんの方の学者芸術家と親交があったから、私はその余沢を十分に受けることができたと思う。岩波は書画骨董を集めることを自ら戒めていたけれども、美術の鑑識眼は鋭く、人間を見る明があった人だ。

昭和四、五年ごろ、柳瀬正夢、大河内信敬、朝井閑右衛門と仲よくなり、その人々を通して幾人かの画家を知った。彼らのアトリエで、油の匂いをかき、絵を描くのを見るのはたのしかった。画家は、私が日頃接している学者たちよりも自由で、のんきでこだわりがなく、酒と一緒にのんでも面白かつ



冬青筆 北軽井沢（クレヨン）

た。

行軍将棋のボール板の裏などへ描いたりした。それらを壁にピンで止めて置いたところ、たまたま東京からやって来た岩波茂雄が見て、「なんだ、はしご段がかいてあると思ったら道か」とひやかした。その絵には 1942. 8. 14. の日付が入っている。絵を自分で描くということに、はじめて興味をもったのだ。絵は画家の描くもので、子供のと時から下手糞だった自分などの描くものではない。絵描きは生まれつき天才的な才能を持った者になるべきものだとい何の抵抗もなく考えていた。しかしこんどクレヨンではあるが、子供のときからまったくはなれていた絵を、自分で描いて見るとたいへん面白いのである。私は東京へ帰ってから絵を描くことについて考えていた。

私が絵に本当に関心を持つようになったのは、昭和十七年の八月で、家族と一緒に群馬県北軽井沢の岩波山荘へ遊びに行ったときであった。そのころ小学校一年生であった息子が宿題の絵ができないというので、彼をばげまして一緒にクレヨンで風景を描いた。そのことが案外に面白かったのでその後、独りで数枚写生をした。紙がないので、

或る日谷中清水町の大河内信敬のアトリエに遊びにいった、北軽井沢でのクレヨン画の話をした。彼は自分も少し日本画をやって見ようと思っているから一緒にやろうという。そして近所に住んでいる堀田秀叢という日本画家の家へ私を連れていった。画家はいと簡単に私たちに絵を描いて見せた。何も見ずにすらすらと魔術師のように筆を動かすのであった。私たちは何となく弟子のような形になって、蘭の描き方を教わり手本を貰った。大河内に教えられて、私は筆、絵の具、紙などを買った。一週間後に自分の絵を持ってゆき、批評され、こんどは菊の手本を貰って来る。このようにして幾回か通っているうちに私に強い疑問が起こってきた。自分が今まで心をひかれ、感激して見た絵と「先生」の絵とは余りにもちがう。こういうひとに絵を教わっていてよいのだろうか。この人が、この人の師匠に教えられ、この人が自分でも修業して獲た技術を気軽に頂戴していいのだろうか。教える方は、どうせ中年者の遊びだろうと思って相手をしているだろうが俺はそんな気持ではない。

丸ビルに和風堂という翰墨を商う店がある。その主人馬場一郎は一路居士といい求道者ともいうべき人であった。晩翠軒に勤めていて、独立のとき漱石から和風堂という屋号を貰ったのだ。その一路居士は商売を熱心にしながら絵を描いた。人の求めに応じて観世音菩薩像を描いて、死ぬまでに、その数は三万三千七百八十七本に及んだという。一路居士は岩波と親しかったので、私も以前から知っていた。或るとき絵を描きだしたと話す、先生について習うのは先生の絵になっちゃってしまうからつまらない、といった。私は近頃考えてはいたが、自分の迷いを指摘されたように感じた。自分たちの周囲には自然があり、優れた先人の芸術がある。そういう立派な師を学ばぬ法はない。私は秀叢のところへ行くのをやめ、写生をはじめ、絵の本をどんどん求めて眺めた。そのころは展覧会などほとんど

開かれなかったので、わずかに個人の所蔵品を見せて貰うのが勉強であった。

花や野菜などを熱心に描いた。ともすると、四、五回ではあるが教わった先生の影響が出るような気がしたので、徹底的に自己流でやるように心がけ、写生に専念した。筆や墨や硯を買い、だんだん入手困難になってゆく中国紙の買だめに骨折った。画仙紙の使い方、墨の濃淡の出し方一つ知らない者が、まったくの独り歩きをはじめたのだ。

丸ビル和風堂へは鎌倉からのゆきかえりによく寄って、その店頭で一路居士から話をきいて、絵のことだけでなく教えられることが多かった。この人は絵を見せると、ごく自然に、勇氣の出るようにほめてくれるのであった。

私の友だちの画家たちはみな油絵を描いている。私が、日本画というか、水墨画を選んだのは、職業があるのでじっくりと時間をかけて一つの絵にかかっていられないと考えたからだ。また今までたくさん絵を見て来たが、自分が好きなのは南画のようなものであって、そういうものを描こうと思った。白い紙へいきなり筆を下ろす、失敗すればとり戻せない。その緊張感、真剣勝負のような気分が、私には大切なことであった。絵を描くのは自分の修業であって、遊びや趣味ではないとそのころから考えていた。また、かねてから私は、人はその生涯にどのくらい緊張し真剣になっているか、その時間を持つか、その時間が多い人ほど優れた、深みのある人になるのだと考えていた。このことが私の絵を描く気持と一致した。

昭和十八年、十九年の前半を私は絵を描くことに熱中した。といっても毎日東京へ通っているのであるから、昼間絵を描けるのは日曜だけである。戦争も大分不利になり、日常の生活も窮屈になった。